

～昨日の風 明日の風～
**経営コンサルタント
独白録**

【第40回】「子象の杭」の話



戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、(株)経営改善支援センター(福岡市、URL <http://sien.co.jp/>)代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家で、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

心理学の分野で、「子象の杭」と呼ばれる話があります。象は現代の地上で最大の生き物であり、その力も最大です。普段はおとなしい生き物ですが、いったん怒り始めると一般の家屋など簡単に破壊しますし、大型のトラックなども軽々と鼻先で横転させます。しかし、長い歴史の中で人間はその象を飼い慣らし、農作業や資材運搬などで利用します。あるいはサーカスなどで芸を仕込み、それを披露して人々の喝采を浴びます。

さて、その巨大で力のある象をどのようにして飼い慣らすのかをご存知でしょうか。象を飼い慣らす方法は、「子象」の時代にあります。生まれたばかりの象や捕まえてきた子象は、丸太でできた杭に繋がれます。大人の象ならば、鼻の先や大きな足で踏みつければ簡単に折れたり抜けたりする程度のものですが、子象にとっては壊すことのできない杭です。動物の本能として自由に動き回ることを望み、子象は何度も杭を壊そうと試みるのですが、杭はびくともしません。そのうちに子象は自分の力ではどうにもならないと思い込み、杭に逆わなくなると言います。つまり、意識の中に杭は絶対的なものであるということが刷り込まれ、成長してからも杭に繋がれた途端おとなしくなるのです。幼い頃から杭につながれた子象は、こうして一生杭に繋がれたまま人間の仕掛けた「偽装限界」の中で一生を終えるのです。

「偽装限界」との闘い

このことは、ある意味人間にも当てはまることです。多くの人間は、親や教師、あるいは歴史や社会からある種の刷り込みを行われていて、本来の自分が持っている能力を発揮することなく日常を過ごしています。

「どうせ私(うちの会社)なんて・・・」「そん

なことを言ってもできっこない」「そりゃあ無理だよ!」

などという言葉は、自らまたは周りから刷り込まれた「杭」、すなわち「偽装限界」なのです。一度その杭と本気で向き合い、死に物狂いで力を込めたらあっさり抜けるものなのかもしれません。中小企業の世界には、5億の壁、10億の壁、30億の壁、50億の壁などという言葉がありますが、これもまた自分達が勝手に思い込んだ「偽装限界」なのです。中小企業であること、地方であること、人材が不足していることなども自分たちの思い込みです。なぜならば、多くの中堅企業や大手企業ですら最初のスタートラインは同じでした。

100億円企業への道

先月、11年ぶりに一度だけ講演をしたことがあった企業で研修をしてきました。帝国データバンクを通しての話でしたが、なぜ11年ぶりに私を呼んでくれたのかを尋ねると、昨期年商が100億を超えたのだが、社員が足元を固めるべきだといい、少し前向きな意欲に欠け始めたので久々に気合を入れて貰おうと考えて依頼をした、という社長の話でした。思わずメモが止まったのは、11年前には20億程度の企業であることを知っていたからです。おまけにこの11年の間には、リーマン・ショックと東日本大震災があって、多くの企業が成長を阻害されていたはずですが、11年前の私の講演がきっかけで、会社が変わることができたというお世辞めいた言葉も頂きましたが、その組織はどこかで「子象の杭」を抜いたのだらうと思います。

さて、個人と組織の「子象の杭」はどこにあるのでしょうか。自分の壁は自分で壊す以外に道筋はありません。